

脳疾患、心肺停止、打撲

搬送の在り方確認

救急症例検討会

製鉄記念室蘭病院（松本高雪病院長）の救急症例検討会が、室蘭市知利別町の同病院で開かれ、西胆振の救急隊員らが、

最近の救急医療の現場で起きた症例や、搬送後の対応・処置の在り方などを発表。医師らとの意見交換を通じて、一刻を争う事態での対応や連携などについて、あらためて確認した。

救急搬送後の同病院での対応や処置などを踏まえ、現場で起きた症例に

ついて、救急隊員らが情報共有を図る勉強会。西胆振の救急隊員のほか、同病院の医師や看護師ら計80人が参加。3症例について報告・検討した。

このうち、「循環器疾患を疑ったが脳疾患であった症例」では、当初、疑われた循環器疾患が実際はくも膜下出血だった—とする例を通じて、搬送を担当した室蘭市消防署が、「得た情報や観察した結果により、傷病者を評価し、適切な医療機

関へ搬送できるよう、活動を心掛けた」と説明した。

このような場合の救急隊の処置や判断、病態などについて解説した脳神経外科の林征志科長は、くも膜下出血の約5%にみられ、予後不良因子の一つになる「神経原性肺水腫」の症状について解説した。

くも膜下出血の心肺停止例では「（頭部の）出血自体は軽症の場合も多い。不整脈が大きく関与している」などと、循環器疾患が疑われる症例でも、くも膜下出血による心肺合併症を疑う必要性を説いた。

このほか、「小児の心肺停止への処置と家族対応」「打撲による腫脹（炎症などが原因で身体の組織や器官がはれ上がる）」の例についても、情報交換しながら検討。成人と異なる対応や、先入観にとらわれず広い視野で救急対応に備えることなどを確認。それぞれが知識を深め合った。

（松岡秀直）



救急搬送の例を通じて、救急隊員と医療関係者が情報交換した「救急症例検討会」